

ビルマ／ミャンマー人元留学生と元日本兵の絆 —今泉記念ビルマ奨学会の支援活動—

梶村 美紀

はじめに

1. ビルマ／ミャンマー人元留学生の概要
2. ビルマ／ミャンマー人元留学生と今泉記念ビルマ奨学会
3. ビルマ／ミャンマー人元留学生がつなぐ教育支援
おわりに

キーワード：ビルマ／ミャンマー人元留学生、
今泉記念ビルマ奨学会、
教育支援

はじめに

日本政府は2008年に留学生30万人計画を発表した。実際に留学生は約30万人にまで増えているが、留学後の進路や草の根レベルの活動を対象にした調査・研究は不十分である。インドネシアおよびタイの元日本留学生を追跡調査したうえで、日本の留学生政策を分析した研究はある（佐藤由利子『日本の留学生政策の評価—人材養成、友好促進、経済効果の視点から』東信堂、2010）。しかしながら、調査不可能であったため、ミャンマー人留学生については触れられてない。

これまでの在日ビルマ／ミャンマー人研究では、難民認定制度をめぐる法的地位や人権問題を扱った研究、外国人としての生存戦略やアイデンティティのあり方を論じた研究、日本語使用の特徴等を論じた研究がある。筆者は、定住ビルマ／ミャンマー人コミュニティにおける組織活動の変遷、それに伴うアイデンティティの変容、長期滞在に伴う当事者と日本との関わり

等について研究してきたが、ビルマ／ミャンマー人留学生を対象とする研究には着手できていない。そのため在日ビルマ／ミャンマー人の全体像を把握するにはいたっていない。

そこで、本稿では、ビルマ／ミャンマー人元留学生の実情を把握し、日本留学が当事者にもたらした意義を明らかにする。まず、各種統計を用いてビルマ／ミャンマー人元留学生の概要を明らかにする。次にビルマ／ミャンマー出身者を対象とした奨学金制度に着目し、その全容を明らかにする。それとともに、その奨学金制度を介して繋がりを得たビルマ／ミャンマー人元留学生による国境を越えた教育支援活動を明らかにする。

1. ビルマ／ミャンマー人元留学生の概要

本節では、日本に留学経験のあるビルマ／ミャンマー出身の元留学生について、各種統計を概観し、その傾向および特徴を明らかにする。なお本稿では、十分な調査ができなかったが、ビルマ／ミャンマー人元留学生に関しては、南方特別留学生の存在を無視することはできない。

南方特別留学生とは、太平洋戦争中に東南アジアの各地から派遣された日本最初の国費留学生である¹。1943年には1期生116名、1944年には2期生89名、計205名の南方特別留学生が

¹ 倉沢愛子編『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社、1997。

来日した²。

そのうち、ビルマから1期生として17名、2期生として30名、計47名が来日し、1名の早期帰国者を除く46名が滞在最長期間である2年間の留学生生活を送った。1期生17名のうち5名は1年目を広島高等師範学校で過ごした³。そのなかには、後に設立されたミャンマー元日本留学生協会(MAJA)の初代会長やビルマ放送局アナウンサーを務めた者もいる。ちなみにミャンマーのMAJA初代会長宅には、留学中の生活拠点であった学生寮の玄関前で撮影した写真が飾られているという。

図1は、日本に滞在していたビルマ/ミャンマー人の総数と留学生数、そして留学生割合をグラフにしたものである。法務省入国管理局の統計を遡ったところ、第1回目の統計(1959年4月)では、韓国・朝鮮および中国以外の外国人については「その他外国人」に一括されており、ビルマ出身者の人数は確認できなかった。第2回目(1964年4月)以降は総数、留学生数ともに国別該当者を確認することができる⁴。ちなみに1964年の在留者総数は74名で、うち留学生は34名であった。留学生割合は46%にのぼり、1990年調査で算出された47%に次いで高い数字となっている。1974年には総数が100名を、1990年には1000名を超え、その後も若干の減少を伴う時期もあるが、全体的には増加している。

1988年には90名であった留学生数も、1990年には575名に急増し、全体の47%を占めている。周知のとおり、ビルマでは1988年に民主化運動

が始まり、学生がその中心であったことから、多くの大学が閉鎖されてしまった。

筆者の聞き取り調査においても、この時期の教育機関の閉鎖とその後の開放政策が留学の直接的契機になった、というケースが非常に多い。それを証明するのが1990年代の留学生割合の増加で、1990年47%、1992年38%、1994年32%、1995年30%と、全体の3割から半数近くが留学生であった。その後、在留者総数は2001年に5,000名を、2014年には10,000名を超え、増加の一途を辿っている。

しかし、留学生数は、1996年から2000年にかけて前年よりも減少し、もっとも少なかった2000年には865名まで落ち込み、その割合は18%であった。この減少については、1990年代前半に留学した層が学業を終え、政情が安定してきたビルマ/ミャンマーへの帰国や別の国への移住、また、日本国内での就職など、新たな生活へ踏み出したことが要因になっていると思われる。2000年代後半から2010年代にかけて、留学生割合は20%前後で推移していたが、近年になり再び25%前後に増加してきている。

ビルマ/ミャンマー人に限らず、留学を希望する多くの外国人学生にとって、奨学金を得られるか否かは、留学の可否を左右する。また、奨学金の額によって、生活費等を稼ぐためのアルバイトの時間も決まってくる。

日本の奨学金は、国費と私費に大別できる。独立行政法人日本学生支援機構の「留学生調査」によれば、2017年にビルマ/ミャンマー人

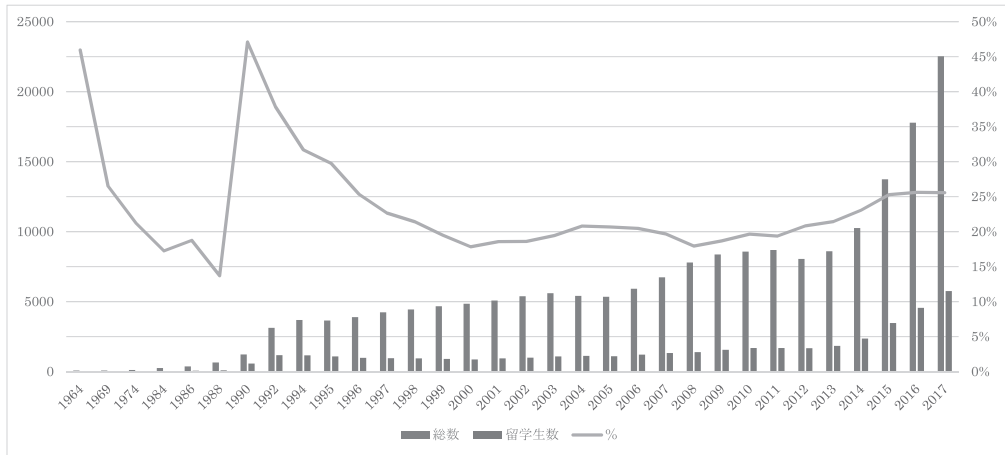
² 江上芳郎「南方特別留学生招へい事業に関する研究(14)-南方特別留学生名簿-」『鹿児島経大論集 第35巻第1号』1994、pp.35-86。

³ 平野裕次「広島の南方特別留学生」広島大学『被曝した南方特別留学生への名誉博士号授与の記録』記念冊子<https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/93045/11.pdf>、2019年3月3日閲覧。

⁴ 第1回～第4回は5年ごと(1959年、1964年、1969年、1974年)に調査が実施されたが、第4回(1974)から

第5回(1984)までは10年間の空白がある。その後、第10回までは隔年(1986年、1988年、1990年、1992年、1994年)で調査が実施され、調査の翌年または翌々年に調査結果が発行されている。第11回(1995年)以降は毎年調査が実施され、調査の翌年または翌々年に調査結果が発行されている。図1では調査年ごとに同間隔で並べていることから、正確さに欠けるとの指摘があるかもしれないので、この点をお断りしておきたい。

図 1 日本在留ビルマ/ミャンマー人総数・留学生数・留学生割合



出典：『在留外国人統計』法務省入国管理局

留学生の調査対象者4,816名のうち、研究者を含む国費留学生が206名、私費留学生が4,610名であった。私費留学生のうち何らかの奨学金を得ている者は261名で、残り4,349名は全額を私費で賄っての留学となっている。

国費は、文部科学省管轄下の「国費外国人留学生制度」であり、各国の日本大使館または領事館で手続きをとる現地採用と、日本国内の大学等を通じて手続きをとる国内採用に分類できる。在ミャンマー日本大使館のホームページにも日本への留学について詳しく紹介されている。同ホームページによれば、国費留学の対象となるのは、研究留学、教員研修、学部留学、高等専門学校、専修学校、日本語・日本研究、ヤング・リーダーズ・プログラムである⁵。

私費留学生を対象とした奨学金制度は複数あるが、ビルマ人元留学生にとっては、次節で詳細を述べる「今泉記念ビルマ奨学会」が特に関わりが深い。それ以外には「ロータリー米山記念奨学会」が、筆者のこの間の聞き取り調査で名前が挙がった奨学金制度である。もちろんこれらの奨学制度以外にもビルマ/ミャンマー人元留学生が奨学金を得たさまざまな民間の制度が存在するが、本稿では十分に調査ができなかった。奨学金を得ることなしに全額私費留学の学生もいる。これらをまとめたものが表1である。

ビルマ/ミャンマー人留学生の進路を調査した独立行政法人日本学生支援機構によれば、2016年調査のビルマ/ミャンマー人該当者は1,433名で、そのうち日本国内に留まった留学

表 1 ビルマ/ミャンマー人元留学生分類一覧表

	奨学金の種類
国費留学	①文部科学省国費外国人留学生制度（現地採用） ②文部科学省国費外国人留学生制度（国内採用）
私費留学	③今泉記念ビルマ奨学会 ④ロータリー米山記念奨学会 ⑤その他の奨学金 ⑥奨学金なし

筆者作成⁶

⁵ 「在ミャンマー日本大使館ホームページ」
<https://www.mm.emb-japan.go.jp/profile/japanese/studyabroad.htm>、2019年3月3日閲覧。

⁶ 本表の作成に関しては、ビルマ/ミャンマー人元留学生の宮山龍馬氏に助言をいただいた。

生は1,209名、帰国者は220名、その他の国への転出者は4名、残り20名については不明となっている。日本国内に留まった1,209名の進路は、937名が進学、183名が就職、89名がその他となっている。一方の帰国者220名の進路は、進学は1名のみで、134名が就職、85名がその他となっている。その他の国への転出では、2名が進学、1名が就職、それ以外の理由での転出が1名となっている。

同年の留学生全体の進路傾向と比較すると、日本国内滞留者では、留学生全体が79%、ビルマ/ミャンマー人留学生が83%、帰国者では留学生全体が17%、ビルマ/ミャンマー人留学生が15%となり、ともに大きな差はない。国内滞留者のうち、就職は留学生全体が23%に対し、ビルマ/ミャンマー人留学生では15%、進学は留学生全体が67%に対し、ビルマ/ミャンマー人留学生が78%と、ビルマ/ミャンマー人留学生の進学率が高くなっている。帰国者の進路においても留学生全体との違いが見受けられ、留学生全体では36%の就職率がビルマ/ミャンマー人留学生では61%と倍近くになっている。帰国後の進路が就職または進学以外のケースについては、留学生全体では61%と高くなっているが、ビルマ/ミャンマー人留学生は39%に留まっている。

以上のことから、在日ビルマ/ミャンマー人総数に占める留学生の割合は相対的に高いことが明らかになった。時には半数近く、近年も四分の一超を占めるなど、ビルマ/ミャンマー人コミュニティのなかでも、元留学生は存在感があ

る。また、ビルマ/ミャンマー人元留学生では、日本への留学後に進路を決定しているケースが平均よりも多いことから、留学が帰国後の就職に有効に機能している傾向が強いといえる。

2. ビルマ/ミャンマー人元留学生と今泉記念ビルマ奨学会

本節では、ビルマ/ミャンマー出身者に特化した奨学制度である今泉記念ビルマ奨学会に焦点を当て、ビルマ/ミャンマー人元留学生の生活状況を把握する。

今泉記念ビルマ奨学会は、会長の今泉清詞氏が私財を投じ、1989年に設立した私設の奨学金団体である⁷。1989年から2008年の19期間に178名のビルマ人留学生に毎月4万円の奨学金を2年間にわたり手渡しで支給した。2008年を最後に奨学金贈呈の制度は終えたが、奨学金を受けた元留学生が学友会を組織し、その活動の一部を引き継いでいる。今泉記念ビルマ奨学会については、マスコミ等でも紹介されている⁸。

また、今泉氏の自宅のある埼玉県鶴ヶ島市は、今泉会長が縁となり、2020東京オリンピック・パラリンピックでミャンマーのホストタウンに決まった⁹。それ以外にも、今泉記念ビルマ奨学会は埼玉県鶴ヶ島市と友好関係を構築し、後述するようにビルマ/ミャンマーにおける教育を支援したり、ビルマ/ミャンマーの伝統的な祭りの一つである水掛祭りを開催するなど、国境を越えた交流を深めている。

今泉記念ビルマ奨学会によって奨学金を得て

⁷ 本節の今泉記念ビルマ奨学会に関する記述は、筆者が2017年2月20日および2018年4月に埼玉県鶴ヶ島市の今泉会長宅にて実施した今泉会長への聞き取り調査および参与観察を元にしてしている。さらに、舟橋左斗子「ミャンマーと日本をつなぐ人（第6回）今泉記念ビルマ奨学会会長 今泉清詞さん 将来ビルマを背負って立つ若者を育てる」ミャンマー総合研究所『季刊ミャンマーフォーカス15（4）』（2008、pp.16-21）も参照した。

⁸ 例えば「戦後70年 元兵士恩返しの奨学金」（『読売新聞』2015年3月23日）、「ミャンマー恩返し奨学金」（『読売新聞』2015年3月23日）、「ひと物語 ミャンマーの人材支援」（『東京新聞』2015年7月5日）、「ひとミャンマーの若者を支援し続ける元日本兵」（『朝日新聞』2015年12月9日）など。

⁹ 「さいたまトーク ミャンマー交流集大成 五輪「ホスト」奨学支援活動が結実」（『朝日新聞』2018年7月28日）など。

いたビルマ/ミャンマー人元留学生（以下、今泉奨学会学友と表記）の発案により発行された記念冊子がある。今泉奨学会学友のコメントや作文、さまざまな活動の写真が収められており、各人の日本留学生生活を把握することができる。記念冊子は、設立10年、15年、20年を記念して発行された、『今泉記念ビルマ奨学会10年のあゆみ（以下、10年のあゆみ）』¹⁰、『今泉記念ビルマ奨学会15年のあゆみ（以下、15年のあゆみ）』¹¹、『今泉記念ビルマ奨学会20年のあゆみ（以下、20年のあゆみ）』¹²の3冊である。

表2は、それぞれの構成およびページをまとめたものである。構成は類似しているが、回を

追うごとにページ数が約2割ずつ増加している。また10年のあゆみには今泉会長および理事の挨拶、記念講話、関係者および学友の寄せ書きが掲載されているが、15年、20年のあゆみにはない。代わりに15年および20年のあゆみには、埼玉県鶴ヶ島市とビルマ奨学会との交流協定書と国際交流の様子が掲載されている。それ以外には、思い出の写真、設立してからの経緯、関係者および学友の挨拶、学友名簿、奨学生応募作文などに多くのページが割かれている。

3冊のあゆみの冒頭には今泉記念ビルマ奨学会の設立の趣旨が記載されている。今泉会長のビルマでの経験やその後の奨学会設立にまつわ

表2 今泉記念ビルマ奨学会記念冊子目次一覧表

総ページ数	132	156	198
内容内訳			
巻頭挨拶	3	2	2
設立の趣旨	1	1	2
応募要領	1	2	0
設立までの経緯	4	4	4
設立してからの経緯	11	16	23
理事挨拶	1	0	0
今泉会長挨拶	4	0	0
創立記念に寄せて	1	1	1
記念式典次第	2	2	1
関係者祝辞	18	10	21
学友挨拶	9	10	20
記念講話	7	0	0
思い出のアルバム	34	50	68
学友会会則	2	2	3
学友名簿	14	20	21
奨学生応募作文集	15	26	0
国際交流活動	0	7	10
サイクロン支援報告	0	0	9
その他目次等	5	3	13

筆者作成。『10年のあゆみ』『15年のあゆみ』『20年のあゆみ』を参照。

¹⁰ 1999年12月1日発行。企画・編集は今泉記念ビルマ奨学会学友会。非売品。

¹¹ 2005年12月1日発行。企画・編集は今泉記念ビルマ奨

学会学友会。非売品。

¹² 2009年11月1日発行。企画・編集は今泉記念ビルマ奨学会学友会。非売品。

る苦勞などをうかがい知ることができるので、
以下に全文を掲載する。

平成元年 4 月 22 日

ビルマは大東亜戦争の戦場となり、物心両面にわたって甚大な被害を被りました。それにもかかわらずビルマの人々は終始好意的で食料やすべての物資を提供して日本軍に協力下さいました。当時従軍した私たちが現在こうして元気で居られるのも、全てビルマの友人の善意のお陰だといつも感謝しております。

ビルマは19万人もの日本の兵士が眠っている聖なる地であります。この英霊を弔うため1974年にビルマを訪れ、戦跡を巡拝致しましたが、ビルマの皆さんは戦争当時と少しも変わらない暖かい友情で私たちを迎えて下さいました。私がビルマにいた期間は僅か3年でしたが私にとっては第2の人生誕生の地であり、第2の故郷でもあります。19万人の戦友たちが永遠に安らかに眠って頂くためにも、ビルマと日本は兄弟として何時までも仲良く協力して行く必要があります。その為何かお役に立てる方法はないかと永い間考えました。その結果これからのビルマでリーダーとなる方々に、高度な技術や知識を身につけて頂きビルマ国発展の原動力になって頂くためのお手伝いをさせて頂きたいと考えて、本会の設立を決意致しました。

但し、資金力が貧弱な為、支給人数は毎年20名限度、支給額は1ヶ月4万円に制約せざるを得ません。そこで金銭面の不足分を精神面で補充したいと考え、毎月の奨学金は定めた日時に直接手渡すことを原則と致しました。関東各地に居住し、平素会うことのない留学生たちが1ヶ月1回会長宅へ集まって情報交換を行い、交友を温めることは遠く祖国を離れて孤独な毎日を送る者にとっては何よりの慰めであり、励みになると確信致しました。

今泉会長が戦時中に経験したビルマの人のびとに対する感謝の気持ちが原動力となり、今泉記念ビルマ奨学会が設立されたことがよく分かる。今泉会長は、今泉奨学会学友に祖国ビルマを率いるリーダーになって欲しいと願っている。新たに採用された学友と初めて接する時には、「日本で勉強しているビルマ/ミャンマー人留学生はエリート中のエリートであり、奨学金をもらわなくても日本の生活には困らないのは分かっているが、ミャンマーの親善大使として敬意を表して差し上げているのだから誇りを持って受け取ってほしい」と伝えるそうだ。

留学を終えて日本で就職したり、アメリカ、シンガポールなどで活躍している今泉奨学会学友は、ずっと国内で暮らしている人より数段力があると信じている。したがって、今泉奨学会学友への期待は大きく、単によい仕事を得て、よい暮らしをしているという程度では物足りなく感じるようだ。

既述のとおり、1989年から毎月20名の今泉奨学会学友が今泉会長の自宅に集まった。会長から奨学金を受け取る事が第一の目的であるが、その場に集まる今泉奨学会学友の間には友情が芽生えた。多くの今泉奨学会学友が学業とアルバイトに時間を割かなければならない生活環境に置かれることから、同国出身者同士であっても日本留学中は友達を作る機会に恵まれない。

ところが、今泉記念ビルマ奨学会では、毎月20名の同胞が集まり、母国語を介して心置きなく悩みを打ち明けることができる。それは留学生生活を送る今泉奨学会学友にとって貴重なもので、200名近いミャンマーの超エリートが電話一本ですぐ繋がることが重要であると今泉会長も認識されている。また26名の博士号取得者を含むこれだけの数の優秀なビルマ/ミャンマー人元留学生と繋がりをもっていることを自慢に思っ

いる。お話を伺った今泉会長の自宅の壁には会長と歴代学友が収まった記念写真が掛けられている。25周年を記念し、今泉奨学会学友たちが贈呈したものである（関連写真、図2、3、4）。

『10年のあゆみ』には19名、『15年のあゆみ』には24名、『20年のあゆみ』には27名にのぼる歴代の今泉奨学会学友が寄稿している。表3は、今泉奨学会学友の寄稿内容を、今泉奨学会/今泉会長/関係者、学友の間に芽生えた友情、

日本での留学経験、祖国ビルマ/ミャンマーの発展、日本とビルマ/ミャンマーの交流、日本の社会や文化に対する理解に分類し、頻出割合を表したものである。今泉奨学会学友たちの率直な思いから、留学生活の実情をうかがい知ることができる。

当然であるが、今泉記念ビルマ奨学会、今泉会長、関係者に関する内容が最多であった。金銭面での支援や関係者の働きへの感謝の言葉は

図2 今泉会長宅に飾られた会長と歴代学友の写真



図3 「ビルマ奨学会 会員名簿」表紙

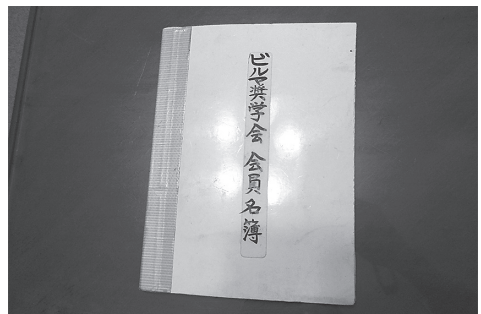


図4 学友の連絡先等が記載された「ビルマ奨学会 会員名簿」

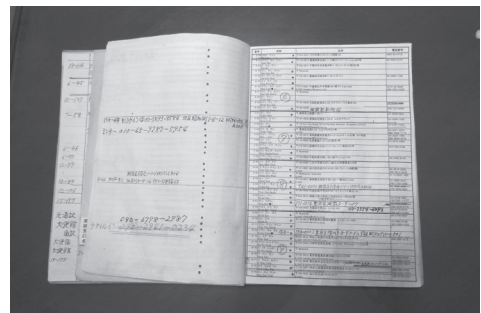


表3 今泉記念ビルマ奨学会学友の寄稿内容

	10周年	15周年	20周年
奨学会/会長	78.9%	91.7%	88.9%
学友間友情	68.4%	79.2%	74.1%
留学生経験	63.2%	33.3%	14.8%
祖国発展	42.1%	41.7%	18.5%
日緬交流	36.8%	29.2%	22.2%
日本理解	10.5%	20.8%	33.3%

筆者作成。『10年のあゆみ』『15年のあゆみ』『20年のあゆみ』を参照。

もちろんであるが、今泉会長の生き様や考え方に感銘を受けたとのコメントが多い。また、ビルマ/ミャンマー人留学生を対象とした唯一無二の存在である今泉記念ビルマ奨学会がいかに貴重な存在であるかという趣旨のコメントも多く見受けられる。なかには今泉会長を父と呼び、学友たちへの思いやりの心やミャンマーへの愛情をビルマ語の詩で表現したコメントもある。

上記と同様に多くの今泉奨学会学友が言及したのが、今泉記念ビルマ奨学会を通して得た友情である。お互いの存在が大きな励みになったという趣旨のコメントが多かった。今泉会長のご意向でもあるが、毎月会長宅に出向き直接奨学会を受け取るという制度は、一見するとやや窮屈に思えるかもしれない。しかし、それは、会長から人生の教訓を得たり、同時期に苦楽をともにした同僚が集う場でもあり、今泉奨学会学友にとっては何物にも代えがたい機会であったと言っても過言では無い。来日後に知り合った今泉奨学会学友の間に強い絆が育まれ、留学生生活を終えても交流が継続されている様子がうかがえる。

留学経験については、日々貴重な経験を積んでおり、在学中に学んだ技術や考え方を自分の財産にしたいとの考えが多くみられた。祖国発展に関するコメントとともに、少しでも多くのことを学び、留学中に学んだ技術を祖国へ持ち帰り、国の発展につなげたいとの強い思いが読みとれるコメントが多くみられた。日本の技術力やインフラ整備の完成度の高さを例に挙げ、近い将来には祖国においても同様の発展を成し遂げられるように、今泉奨学会学友をはじめとする留学経験者が、祖国の発展を主導すべきだとの考えが共有されている。

『15年のあゆみ』と『20年のあゆみ』には、国際交流活動として、2001年に埼玉県鶴ヶ島市国際交流協会と今泉記念ビルマ奨学会/学友会との

友好交流締結に関する協定書や鶴ヶ島市役所で開催された調印式の際の写真が掲載されている。それ以外にも、今泉会長と在駐ミャンマー大使との相互訪問の様子、地域のイベント等で今泉奨学会学友がミャンマー舞踊を披露したり、茶道を体験するなどの交流の様子が収められている。日本側だけでなく、ビルマ/ミャンマーで撮影された写真、例えば、地元の小学生が交流目的に絵を描いている様子なども収められている。

今泉記念ビルマ奨学会は、今泉会長の年齢等を考慮して2009年に組織替えをした。この組織替えは、今泉記念ビルマ奨学会の活動の終了を意味する訳ではない。200名近い今泉奨学会学友を金銭面だけではなく、精神面で支え続けた今泉記念ビルマ奨学会、そして今泉会長の存在は簡単に忘れ去られるものではない。奨学会と学友会を合体し、今後は寺子屋や図書館の建設など、ミャンマーの子どもたちを対象とした教育支援を目的とした組織へと舵を切ったのである。

3. ビルマ/ミャンマー人元留学生がつなぐ教育支援

本節では今泉奨学会学友が中心となって、または、協力して展開されている教育支援の実例を考察する。ビルマ/ミャンマー人元留学生の宮山龍馬氏によれば、草の根レベルでの活動には、日本で習得した専門知識の還元、祖国での教育や医療支援、文化活動などへの貢献、さまざまな機会を通じての日本政府への働きかけ、日本の有力者との交流などがあるという。本節では、今泉記念ビルマ奨学会理事の原田裕子氏への聞き取り調査¹³を中心に、ビルマ/ミャンマー人元留学生が展開する教育支援についてまとめていく。

原田氏は2001年からビルマ奨学会の運営を補助している。日常的な連絡のやり取り、年に3

¹³ 2018年12月16日、東京都にて実施。

回行われる行事¹⁴のサポート、他団体との交流¹⁵など、多方面から今泉記念ビルマ奨学会を支えている。理事として、奨学生の選考面談にも関わるようになり、それまで男性の奨学生が多く採用されていた傾向を是正したり、着付けや茶道などを体験できる機会を提供するようになった。

また、今泉奨学会学友から直接相談を受けることもある。相談内容としては、日本語の使い方、特に挨拶文や敬語の使い方であったり、職場での習慣やマナーなど、日本社会で生きていくためのノウハウに関するものに集中しているようだ。それ以外にも、恋愛相談や個人的な悩みを聞いてほしいとの要望もあったという。原田氏は、わざわざ今泉会長に伝えるほど深刻な問題ではないが、日常的に困っている事を気軽に相談できる存在であったといえる。

今泉奨学会学友による教育支援はミャンマー国内に向けられており、大きく分けて、①文具の寄付、②学校運営および建設、③現役大学生を対象にした奨学金支給に分類できる。これらの教育支援には今泉会長を通して培われている人脈が活用されており、相互に効果的な結果を生み出している。

今泉奨学会学友による一つ目の教育支援は文具の寄付である。この支援は、今泉会長の自宅がある埼玉県鶴ヶ島市の国際交流協会が中心となり、今泉記念ビルマ奨学会および今泉奨学会学友の協力を得て実施されている¹⁶。2007年度より鶴ヶ島市民を対象に不要になった文具を募り、それをビルマ/ミャンマーに送っている。2012～2017年度の送付実績は以下の表4の通りである。近年は100キログラムを超える文具が集まり、それを船便で送っている。

表4 埼玉県鶴ヶ島市からビルマ/ミャンマーへ送付された文具の量（単位：キログラム）

年度	送付量
2012	111.0
2013	250.5
2014	85.0
2015	60.4
2016	111.1
2017	113.5

出典：埼玉県鶴ヶ島市役所 橋本道生氏提供資料

この教育支援は、ビルマ/ミャンマーでは文具が慢性的に不足しているとの情報を今泉会長から聞いた鶴ヶ島市が、市民に呼びかけて文具を集めたことが始まりである。市の広報誌を通して文具の寄付を募っており、現在では市民にすっかり浸透しているという。例年6月から市の広報紙やホームページ等で寄附を呼びかけ、12月に締め切り、年明けにビルマ/ミャンマーに送付するという流れで実施されている。文具の種類は、鉛筆、ボールペン、シャープペンシル、ノート、消しゴム、定規など多岐にわたる。集まった文具は、鶴ヶ島市国際交流協会の予算と市民からの寄付¹⁷を使って、船便で送付している。現地では、元ビルマ/ミャンマー人留学生である今泉奨学会学友が窓口となり、文具を受け取る。対象となる児童養護施設、寺子屋、小学校などを事前を選び、それぞれの場所に学友が出向いて文具を配付している（関連写真、図5、6）。

学校運営および建設は、埼玉県鶴ヶ島市を拠点に活動する国際ロータリーが中心となって、今泉記念ビルマ奨学会および同学友会の協力を

¹⁴ 1月の新年会、5月の総会、そして9月23日の今泉会長誕生日に合わせて実施される謝恩会がある。

¹⁵ 国際ロータリー第2570地区国際奉仕部門、ミャンマー大使館、埼玉県鶴ヶ島市および同市国際交流協会などとの交流がある。

¹⁶ 本事業の詳細については、埼玉県鶴ヶ島市役所市民生活部オリンピック・パラリンピックプロジェクトチーム主幹の橋本道生氏にご教示いただいた。

¹⁷ 文具の募集と同時に送料を募る募金箱を設置して送料の一部に当てている。

得て実施されている¹⁸。国際ロータリーは日本

図5 埼玉県鶴ヶ島市民から寄付された文具



埼玉県鶴ヶ島市役所橋本氏提供

図6 子どもたちへ「図5」の文具を手渡す
今泉奨学会学友



埼玉県鶴ヶ島市橋本氏提供

ユネスコ協会連盟の識字キャンペーン「世界寺子屋運動」に賛同し、1993年より間接的に支援していた。2000年度以降は直接的な支援に切り替え、ネパールへの支援を皮切りに、2004、2005年度には、老朽化したミャンマーの寺子屋の修繕支援を行った。その後、2012年度に今泉記念ビルマ奨学会および同学友会等について今泉会長よりお話いただいたことをきっかけに、今泉奨学会学友に日緬国際親善の架橋になってほしいとの思いが強まり、協力関係を構築するようになった。

その後、2014年には国際ロータリーの委員会メンバーが支援した複数の寺子屋を訪問し、今泉奨学会学友とともに教育支援を定着させた。さらに2017年度からは、新たな学校の建設という活動にも取り組んでいる。具体的には、教育施設のない僻地の一つであるミャンマー北部のカチン州プータオ市において学校建設を計画している。校舎の建設では、豪雨や強風に耐えられるように、屋根、天井、窓ガラス、出入口ドアなどを強化中である。今泉奨学会学友が今泉会長の地元にある国際的な支援組織と協力し、寺子屋支援や新たな学校の建設へと教育支援が広がっている（関連写真、図7）。

最後に、ミャンマー国内の現役大学生を対象にした奨学金支給による教育支援をみてみたい。この教育支援では、今泉奨学会学友が留学生生活を支えてもらった経験をふまえ、今度は自分たちがその感謝の気持ちを表わそうと考え、今泉会長にも相談し、計画を練った。

諸事情により長年実現できなかったが、2018年6月によりやく今泉奨学会学友の主催で奨学金の贈呈式典を執り行った¹⁹。式典に合わせミャンマーへ渡航した原田氏は現地で歴代の今泉

¹⁸ 本事業の詳細については、国際ロータリー第2570地区国際奉仕部門委員長の梅沢茂氏にご教示いただいた。

¹⁹ 今泉記念ビルマ奨学会ホームページに当日の様子

が報告されている。<http://www.meiwa-corp.com/shougakukai/index.php?奨学金授与式>、2019年3月3日閲覧。

図7 ミャンマー北部カチン州に建設中の学校



国際ロータリー梅澤氏提供

図8 スクリーンに映る今泉会長と奨学金贈呈式で挨拶をする原田理事



今泉ビルマ記念奨学会原田理事提供

奨学会学友と合流し、先述の国際ロータリーの協力を得て準備した奨学金を、ヤンゴンにある5つの大学の計30名の学生に贈呈した。対象者の選考は、今泉奨学会学友会の初代会長を含む現地の今泉奨学会学友が担当し、今泉記念ビルマ奨学会と同じく書類審査と面談を実施した。式典には約40名の今泉奨学会学友と家族もかけつけた。あいにく直接式典に参加できなかった今泉会長は、出発前に撮影したビデオレターにて新たな奨学生を激励した（関連写真、図8、9）。

これらの教育支援は、いずれも今泉会長から今泉奨学会学友へ施された支援が、地域の関係者の協力を得ながら引き継がれたものである。ビルマ/ミャンマー人元留学生によって構築された草の根レベルでの教育支援は、今泉会長のビルマ/ミャンマーへの感謝の気持ちなど、国境を越えた様々な繋がりに支えられている。今後は、ビルマ/ミャンマーの子どもたち、学生へと引き継がれていくことだろう。

おわりに

本稿では、ビルマ/ミャンマー人コミュニティのなかで、調査研究が不十分であった元留学生の姿を明らかにするために、その概要、今泉記念ビルマ奨学会を通しての生活状況、今泉奨

図9 今泉奨学会学友会から奨学金を贈呈されたミャンマーの学生たち



今泉ビルマ記念奨学会原田理事提供

学会学友が展開する教育支援についてまとめた。南方留学生に始まったビルマ/ミャンマー人留学生は、在日ビルマ/ミャンマー人コミュニティのなかでも存在感があり、日本との友好関係構築にも不可欠な存在である。

今泉会長から金銭面のみならず、精神面でも薫陶を受けた今泉奨学会学友の存在は、これまで明らかにされていなかったビルマ/ミャンマー人コミュニティの一面である。さらに、今泉奨学会学友によって構築された草の根レベルでの教育支援活動は、日本とミャンマーのつながりを深め、新たな友好関係を生み出す可能性を秘めている。

国境を越えた人の移動は増大しており、「単

「一民族国家」を標榜していた日本においても、最近、制度の拡大や在留資格新設などの議論が活性化している。それと同時に、今後は移民政策や留学生政策など外国人政策全般の確立が日本の喫緊の課題であると認識されつつある。留学生との新たな関係構築のためにも、本稿で取り上げたビルマ/ミャンマー人元留学生のもたらす友好関係は先駆的な事例となるのではないだろうか。